徳　田　屋　跡

徳田屋は江戸時代から明治・大正期まで続いた浦賀を代表する旅館です。

創業は詳らかではありませんが、寛政の改革を行った松平定信が相模・伊豆の沿岸を視察した折に止宿したという記録からすると１７００年代の終わり頃には存在したことがわかります。

しかし、正式に旅宿（御用御宿）となったのは文化８年(１８１１)３月のことであり、これが浦賀の旅館の始まりです。

ペリーが来航した嘉永６年(１８５３)6月には黒船を見聞するために吉田松陰が二度目の宿泊をして、ここで佐久間象山に会っています。

松陰も象山もこれより二年前の嘉永４年（１８５１）松陰は熊本藩士　宮部鼎蔵とともに江戸湾沿岸の防備状況視察のために、象山は門弟の小林虎三郎を伴って思索の旅で徳田屋を訪れています。

この他　浮世絵師の安藤広重が安政５年(１８５８)に、これより先の安政２年(１８５５)には木戸孝充（桂小五郎）が浦賀奉行所・与力中島三郎助に造船技術の教授を得るために来訪した折に泊まっています。

幕末から明治維新の激動のなかで浦賀を訪れた数多くの武士や文化人が徳田屋に宿泊し、ここから日本を見、世界を見て時の移り変わりを認識して、近代日本が誕生したわけですから、その意味からも徳田屋の果たした役割の大きさは大変なものがあります。

その徳田屋も大正１２年の関東大震災の際倒壊して姿を消してしまいました。

現在上原家の所有地である東浦賀町２丁目２０番地この場所が徳田屋跡地であります。

浦賀地域文化振興懇話会